



「教師からの推薦図書だより」2019 第9号

樟蔭中学校・高等学校では、先生方からのオススメ本を定期的に紹介していきます。

今回は、先生ではなく「全国の書店員さん」からの推薦図書を紹介します。

この中から大賞となるのは一体  
どの作品かしら…?



「ん？どういうこと？」と思った皆さん！皆さんは「本屋大賞」って知ってますか？

「本屋大賞」とは、全国の書店員さんが有志で組織する本屋大賞実行委員会が運営する、書店員の投票だけで選ばれる賞です。過去一年の間、書店員さん自身が自分で読んで「面白かった」、「お客様にも薦めたい」、「自分の店で売りたい」と思った本を選び投票します。常に本に触れ続けている書店員さんがオススメしてくれる本…なんだかワクワクしませんか？

今回は2020年のノミネート作品をご紹介します！樟蔭の図書館にも勿論あります！是非読んでみてください！

とがみひろまさ  
線は、僕を描く 著: 砥上裕將



両親を交通事故で失い、喪失感の中にあつた大学生の青山霜介。ある日アルバイト先の展示会場で出会った水墨画の巨匠に気に入られ、弟子になることに。霜介は戸惑いながらも水墨画の魅力に引き込まれていく。著者の砥上裕將さんは水墨画家としても活動されているそうで、絵を描くシーンは目の前の絵が広がっていくようなリアリティがあります。その迫力と美しさに、水墨画になじみのない方でもきっと霜介のように熱中してしまうはず！

店長がバカすぎて 著: 早見和真



「幸せになりたいから働いているんだ」  
谷原京子、28歳。独身。とにかく本が好き。現在、〈武蔵野書店〉吉祥寺本店の契約社員。山本猛(たける)という名前ばかり勇ましい、「非」敏腕店長の元、文芸書の担当として、次から次へとトラブルに遭いながらも、日々忙しく働いている。あこがれの先輩書店員小柳真理さんの存在が心の支えだ。そんなある日、小柳さんに、店を辞めることになったと言われ……。谷原京子(契約社員、時給998円)「マジ、辞めてやる!」でも、でも…本を愛する私たちの物語。

夏物語 著: 川上未映子



大阪の下町に生まれ育ち、東京で小説家として生きる38歳の夏子には「自分の子どもに会いたい」という願いが芽生えつつあった。パートナーなしの出産の方法を探るうち、精子提供で生まれ、本当の父を捜す逢沢潤と出会い、心を寄せていく。いつばう彼の恋人である善百合子は、出産は親たちの「身勝手な賭け」だと言い、子どもを願うことの残酷さを夏子に対して問いかける。この世界は、生まれてくるのに値するのだろうか。この物語には、人が生まれて生きて、そしていなくなることの、すべてがある。

熱源 著: 川越宗一



樺太(サハリン)で生まれたアイヌ、ヤヨマネクフ。開拓使たちに故郷を奪われ、集団移住を強いられたのち、天然痘やコレラの流行で妻や多くの友人たちを亡くした彼は、やがて山辺安之助と名前を変え、ふたたび樺太に戻ることを志す。一方、プロンスワフ・ピウスツキは、リトアニアに生まれた。ロシアの強烈な同化政策により母語であるポーランド語を話すことも許されなかった彼は、皇帝の暗殺計画に巻き込まれ、苦役囚として樺太に送られる。日本人にされそうになったアイヌと、ロシア人にされそうになったポーランド人。文明を押し付けられ、それによってアイデンティティを揺るがされた経験を持つ二人が、樺太で出会い、自らが守り継ぎたいものの正体に辿り着く。

第162回  
直木賞



## ノースライト 著: 横山秀夫

横山ミステリー史上最も美しい謎。熱く込み上げる感動。一家はどこへ消えたのか? 空虚な家になぜ一脚の椅子だけが残されていたのか? 『64』から六年。待望の長編ミステリー。一級建築士の青瀬は、信濃追分へ車を走らせていた。望まれて設計した新築の家。施主の一家も、新しい自宅を前に、あんなに喜んでいたので……。Y邸は無人だった。そこに越してきたはずの家族の姿はなく、電話機以外に家具もない。ただ一つ、浅間山を望むように置かれた古ぼけた「タウトの椅子」を除けば……。このY邸でいったい何が起きたのか?



## むかしむかしあるところに、死体がありました。 著: 青柳碧人

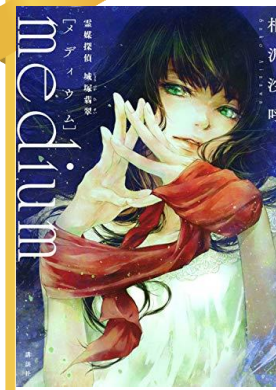
昔ばなし……なのに……新しい!?!  
むかしむかしあるところに、浦島太郎という漁師がありました。ある日、太郎は、海辺でいじめられていた亀を助けました。亀はお礼にと、太郎を龍宮城に案内しました。その龍宮城で事件は起こりました!なんと伊勢海老の「おいせ」が殺されたのです!太郎は亀に頼まれて、殺人事件の調査に乗り出しました… (第4話「密室龍宮城」より)。全5編収録。

「浦島太郎」や「鶴の恩返し」といった皆さんご存知の《日本昔ばなし》を、密室やアリバイ、ダイニングメッセージといったミステリのテーマで読み解く全く新しいミステリ!



## ムゲンのi 著: 知念実希人

展開も結末も予測不可能な超大作ミステリー!!  
若き女医は不思議な出会いに導かれ、人智を超える奇病と事件に挑む。眠りから醒めない四人の患者、猟奇的連続殺人、少年Xの正体——すべては繋がり、世界は一変する。  
眠りから醒めない謎の病気〈特発性嗜眠症候群〉通称イレスという難病の患者を3人も同時に抱え、識名愛衣は戸惑っていた。霊能力者である祖母の助言により、患者を目醒めさせるには、魂の救済〈マヴィグミ〉をするしか方法はないと知る。愛衣は祖母から受け継いだ力を使って患者の夢の世界に飛び込み、魂の分身〈うさぎ猫のククル〉と一緒にマヴィグミに挑む——。



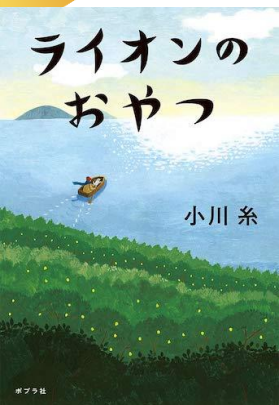
## medium 霊媒探偵城塚翡翠 著: 相沢沙呼

この探偵のどこが凄いのかについては、読んだ人  
としか語り合えません。最後まで読み切った人  
としか……(含み笑い)。/有栖川有栖

これはまさに超力作の傑作。  
僕は特殊ミステリの最新形態  
と呼びたいです。特殊性をああ  
使うとは!/今村昌弘

「全てが、伏線」の初刷  
帯に偽りなし。本年度の  
必読作です!/浅ノ宮遼

完全に掌の上で転がされました。脱帽です。  
「2019年最驚のミステリ」という惹句も  
絶賛の声も大きすぎやない。/葉真中顕



## ライオンのおやつ 著: 小川糸

男手ひとつで育ててくれた父のもとを離れ、ひとりて暮らしていた雫は病と闘っていたが、ある日医師から余命を告げられる。

人生の最後に食べたいおやつは何ですか——  
若くして余命を告げられた主人公の雫は、瀬戸内の島のホスピスで残りの日々を過ごすことを決め、穏やかな景色のなか、本当にしたかったことを考える。ホスピスでは、毎週日曜日、入居者がリクエストできる「おやつの日」があるのだが、雫はなかなか選べずにいた。——食べて、生きて、この世から旅立つ。

すべての人にいつか訪れることをあたたかく描き出す、今が愛おしくなる物語。



## 流浪の月 著: 凧良ゆう

あなたと共にいることを、世界中の誰もが反対し、批判するはずだ。わたしを心配するからこそ、誰もがわたしの話に耳を傾けないだろう。それでも文、わたしはあなたのそばにいたい——。再会すべきではなかったかもしれない男女がもう一度出会ったとき、運命は周囲の人間を巻き込みながら疾走を始める。新しい人間関係への旅立ちを描き、実力派作家が遺憾なく本領を発揮した、息をのむ傑作小説。

せつかくの善意をわたしは捨てていく。  
そんなものでは、わたしはかけらも救われぬ。  
愛ではない。けれどそばにいたい。